

# HISTORY OF MOBILE SUIT

ZION OF FEDERAL STATE

限定版



*Hi Okawara*

BAN  
DAI

## ジオン軍モビルスーツ 発達史

ジオン公国が今時大戦において、連邦軍に立ち並ぶ事の出来たのは、大戦初頭におけるモビルスーツ機動部隊の活躍による物である。モビルスーツは、ミノフスキー粒子干渉下での有視界戦に焦点を絞った兵器であり、ジオン国防省の要請で数々の設計を繰り返した末の成果である。当初、軍の要求した内容を満たすためには、あらゆる戦略行動下にも適合し得る移動力、装甲、兵器搭載量を同時にかなえなければならなかった。また侵攻作戦や作業性の問題から、構想確立後5年にして二足歩行型すなわち人間型兵器として具現化する事となる。これが後のザクモビルスーツの基本となるMS-01である。国防省は新型兵器としてMSの型式番号を与えると同時に対外向けには、作業用宇宙機として発表した。とりあえず基本形のみ状態から、ジ

オンは除々に兵器として性能を満たすべく改良研究を重ねていった。機動性の向上と重装甲は機体とパイロットを保護する上で切実な問題だったわけである。実戦用モビルスーツと呼べる物はMS-04からであろう。期待を一身に背負ったMS-04はその後さらに無駄の排除を続け、全く人間型の外部デザインのMS-05通称ザクモビルスーツで完成を見る。

機動軍設立によってMS-05は初期生産分二十七機によって実戦部隊が設けられた。パイロットの養成と共に得たノウハウからMS-05は、さらに改良を続け、完全戦闘用モビルスーツMS-06ザクIIとして完成する。実にMS-01から七年の歳月を経ての事であった。

MS-06を伴う駆逐艦隊の活躍は兵器史上、類を見ない物で、ジオン公国は宣戦布告から一週間の内に四つのサイドを殲滅、人類総人口の五十パーセントを死に至らしめた。

その後南極条約等によって事実上の膠着状態に陥ってからは、ジオンは地上部隊の増強のため陸上兵器としてのモビル

スーツ改良へと進んで行った。開戦直後からの数々の展開を考慮したジオン軍は地上戦用モビルスーツを次々と開発した。MS-06を基本にそれ自体のバリエーションも様々な展開を見せるが、白兵戦での戦闘力をより強化したMS-07、MS-08を開発するに至る。どちらもMS-06をベースにした物であったがコストとスベックの見合わないMS-08は却下された。地上戦で重量配分と装甲の問題をいかんとも出来なくなる事を予測したジオン軍は、陸上戦用重モビルスーツMS-09ドムを開発する。熱核ジェットエンジンを装備したMS-09はホバリング走行によって地上戦でのモビルスーツ移動力の問題を克服したと言える。

基本設計で汎用性を求めたため、ジオンは局戦用にはザクと別設計のモビルスーツを作らねばならぬ不運に会った。各地での地上制圧のために不可欠となったのは水陸両用モビルスーツであった。この事は構想の中に含まれており、開戦前にはザクを基にしたMS-06Mで種々の試験を行っていた。量産されたMS

Mシリーズ3種の他には5機種のフロートタイプと付随する湿地戦用アックタイプシリーズ3種が作られている。運用を限定する方向でジオンモビルスーツ部隊は成功を見出す事が出来たと言える。

限定使用の目的はモビルスーツの長所を生かしたモビルアーチャーへと発展してゆく。その間も宇宙戦用のザクの後継機としてMS-R09、MS-14が、開発される。殊にMS-14では、ビーム兵器の標準装備化に成功し総合性能でのアツフは、MS-14で完全に昇華された。これに先行してジオンではニュータイプを兵器体系へ組み込むべく先述のモビルアーチャーを発展させてゆく。当初否定された戦闘機型へと戻ってゆくわけで、サイコミュコントロールで兵器を扱う事で有視界戦でのモビルスーツの効能に頼る必然性が無くなったからであった。しかしニュータイプとして覚醒した人間も少なかったため、一部のニュータイプパイロットに合わせた物である。その意味で格闘戦を本意とするモビルスーツ型の究極としてMSN-02ジオング(MS-16)を生むに至った。

# MS-06ザクIIの バリエーション

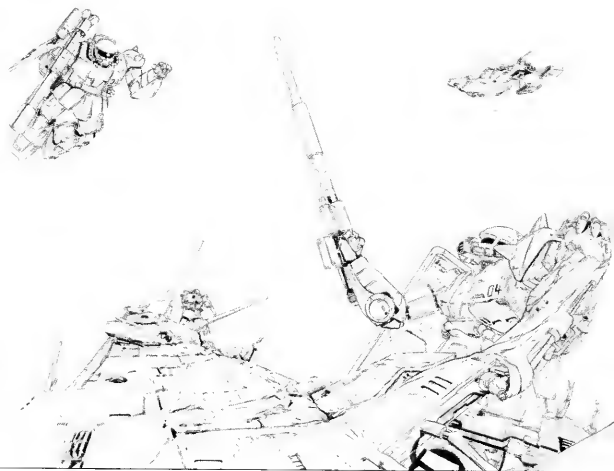
MS 06ザクIIは、全てのモビルスーツの基本であり、これをベースにあらずるザクのバリエーションが生まれた。当初空戦に使用されたザクにはA、CタイプがあるがAはほんの少数が生産されただけで、生産ラインはCタイプへと受け継がれた。外見上の差異はほとんど無いか、コクピットの開閉システムが異なっていた。続くFタイプではハイロケット側からの意見でコクピットの改良とハイロケットが一部変更となった。

優れたハイロケットを擁護するのはいつの世も同じだが、ザクでも一部の要請に応じて機動性の高いモデルを生んだ。推進エンジンの出力を3割アップしたSタイプである。これは指揮官用として百機余りが造られたと言われている。さらにザク本体自身の性能向上を計るためエンジンの推力を倍にアップし、増速用ブースターを設けたRタイプが作られた。このRタイプはコストの問題を大きくかかえたため、ハイロケットの練度の低下か

ら少数が生産され、一部の熟練パイロットに使用されたにとどまったが、燃料搭載量を増大化しR09タイプと機種選定で争ったR 2タイプもある。初期から中期にかけては強行偵察型としてEタイプ（モノアイを大幅に改良、軽量化して探知システムを各部に設けた）か、トレーナーとしてTタイプも少数ながら生産された。

地上戦ではFタイプから不慣れたシステムを無くし軽量化を計ったJタイプが主に活躍している。これを基にあらずる研究試作機が誕生した。最も需要の高かったアフリカ・アジア向けに熱帯戦用Dタイプを提供、対空防御と中距離支援のためにK（J 12）タイプ、水流エンジン試験用Mタイプ、移動性能をアップしたGタイプ等がつくられた。

ザクはあらゆる研究母体に使用されたが、異様を極めたのはサイコミュシステムを搭載したZタイプであろう。MSN 02のテストベースに使用された物でMSN 02で使用する予定のヒーム砲を両腕にそのまま装着したため、腕だけが異常なオーバーサイズとなっていた。

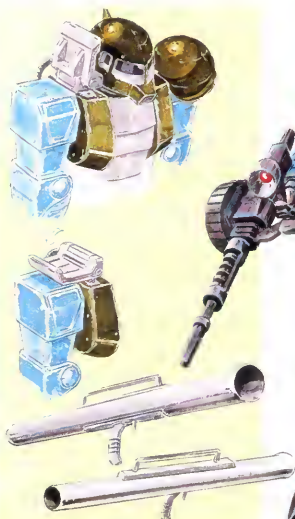


# HISTORY OF MOBILE SUIT

▼MS-05A



▼MS-05用280mmバズーカと  
固定器



▼MS-06F  
機雷散布ポッド付



◀MS-06F  
空間戦用



▼MS-06J  
湿地戦用



MS 06R サク

▼MS-06R-1A  
三連星使用機



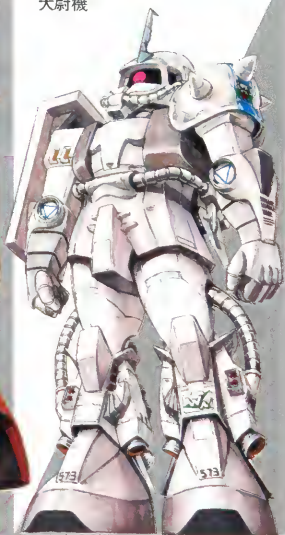
▼MS-06R-1



▼MS-06R-2 ジョニー ライデン  
少佐機



▼MS-06R-1A シン マツナガ  
大尉機



# HISTORY OF MOBILE SUIT



**MS 06R**はそれまでの主力であったFタイプの性能向上を目的として計画されたタイプである。試作上の改修点は、背部、腰スカート、脚部で、ここを中心にエンジンのハワーアップが計られた。殊にランドセルは通常タイプをはるかに上回る推力二一八トンの物を2機装備するという徹底ぶりである。テスト用の1・2号機は全体をオレンジイエローに塗装し、グラナタ基地で各種テストが行なわれた。このテストの際にはザク開発当時のからのテストパイロットであるエリオット・レム少佐が招かれ、少佐自らが1号機を操縦して2週間に渡ってテストを繰り返し、性能は極めて良好で、即時量産化が決定、Rタイプの形式名称を与えられ初回生産分として22機が発注された。

ロールアウトした機体は実戦テストを兼ねて各方面へまわされた。但し開戦当初の作戦で**MS 05**部隊からの優秀なパイロットを多数失った事は未だ大きな影響

を残しており、高機動型として開発されたRタイプを操縦しきれぬパイロットが続出したのである。これはFタイプにも言える事だが、機体内部にわずかしき搭載し得ないロケット燃料をすぐに使い果してしまい易い事が、パイロットに恵まれなかったザクの不運と言えよう。

**MS 06R**には大きく分けて3つのタイプがある。

元々燃料の補給は母艦であるムサイもしくは、バルキリータイプの空母で可能であったが、度重なる戦場からの報告に、背部及び脚部の燃料房が簡易カートリッジ化された。改修前の22機までを（内10機余りは後に同仕様へ改造）R1、その後のカートリッジ式の物をR1Aとして区別する。作戦を共にするムサイにも、この補給設備を設けRタイプを主とする、またはのみで構成する小隊単位に一機の割で補給用のザクが随伴した。

機体自体は熟練パイロットによって高性能が見出されたが、Rタイプを実動させるために必要な条件が複雑化し、低価格、簡易性を欠くためその後の生産は中止された。とは言ふ物のエースパイロットからの評判は良く、生産ライン上の十数機に至るまで各方面より引き合いがあり、残数は注文調整の形で一機ずつが渡されたという事である。

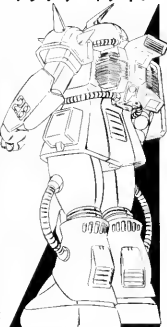
Rタイプの使用例は、各エースへまわされた事も手伝って派手かつ有名な物が多い。中でもキシリア少将直属であるAガイア少尉（後に大尉で戦死）率いる「黒い三連星」はその最たる物であろう。彼らはチーム行動

をとるようになってから、**MS 05B** **MS 06C**、**S**、**R**と乗り継いでおり、**S**タイプからは、ブラック、ハープル、ミディアムシグレーの3色を基調にしたチームカラーを用いたが、これは彼らが初の**MS 09**小隊として地球に降りた時にも使用、後に**MS 09**の正式塗装にも採用されている。

**R1A**を駆るエースの内、三連星に次いで有名なのは、ソロモン方面軍のシン・マツナガ大尉である。26才という年令にして開戦より5隻のサラミスとマゼラン一隻を単独で撃沈せしめ、トズル中将戦場視察（実際は戦闘参加）の折に中将の護衛を務め上げた猛者である。彼は乗機をホワイトとグレーで塗装し、「白狼」として恐れられた。

**MS 06R**の3つめのタイプは、**MS 06**の後継機選定で**MS R09**と争った**MS 06R2**である。燃料搭載量を18%アップし、脚部装甲を強化、コクピットをダイレクト・インに変更など、各種改修を行ない4機がつくられたが、もはや一部性能で優れてはいる物の総合性能で**MS R09**には今一歩遅れをとっていた。この**R2**タイプもしばらくしてエースへまわされたが活躍した例は、ジョニー・ライデン少佐の乗機が有名である。機体は真紅に塗装され、各所に黒を使った実に鮮やかな物であった。戦後の写真集で「赤い彗星」のRタイプとして誤まって紹介されているのは、このライデン少佐の乗機である。

# MS-06D ザクデザートタイプ



ジオンの地上部隊の侵攻で数々の改良がザクに施されたが、局戦用として最も要請の強かった物は、熱帯・砂漠戦用タイプであった。局戦用モビルスーツとしては、固定武装を強化したMS 07がすでに進行中であったが地上戦用のMS 06Jの需要の最も高いアフリカ戦線向けとして、ザクの改修プランはスタートしている。軽量化と共に基本的な出力のアップから手はつけられた。またその分は実戦データから部分的に増加装甲がつけられ、特殊武装の開発にも焦点があてられている。

ロールアウトした物はDタイプの名称を与えられたが、他のザクに比べて角張ったデザインとなり、頭部には07に先かけて通信用アンテナが設けられ、実験部隊には識別しやすいシングルアンテナと、両脇に持つダブルタイプの2種がまわされた。武装は着脱式ロケットホッドを2種、腰にはSA 7-2クラッカーホッド、マシンガンは多少の改修を施した。配備しきれなかったドムの代役は充分果たしたと言え、初期は2種で43機ずつ、後期にはアンテナをシングルに統一して28機が作られた。

# MS-06K ザクキャノン



MS 06Kは、ジオン軍地上部隊の作戦時に、より機動性の高い対空防御の手段として考案されたタイプである。マサイフランでは、単にMS 06Jに対空砲をオフショーンで装備するという物で、重量バランス等の問題を解決出来ぬまま進展を見なかった。

その北米キアルフォルニアへ入電したRXスーツの情報によって再度内容が検討された。試作上、対空防御を主意とせず、対MS戦における支援を目的としたのである。一号機はキアルフォルニアでロールアウトし、モニターアイを全周式に改め、右肩に一八〇ミリキャノン砲が一門セットされた。

これは背部のランドセルに一体化しており、換装すれば基のJタイプ同様に扱う事が可能であった。脚部には07のノウハウを活かして補助推進機が装備され、機動力を補っている。試作は9機にとどまり、全機共北米で実戦参加した。標準色はタークグレーであったが、クレイテン中尉の使用機は、アンテナを2本にしラビットタイプと言われた。大量MS戦を想定して、脱着式のビッグガンをランドセルにストラップで固定する事も出来た。

# MS-06M 水中用ザク



ジオンは地球侵攻作戦において、水中行動も可能なモビルスーツの開発の必然性を覚えた。当初のプランはMS 06の水中戦可能化であったが、スベックは思う様に満たされずこのプランはザクを基本に水流エンジンの実用試験と、水中戦用兵装のデータ収集という道で続行された。当然平行して新設計のモビルスーツ開発が進められたわけだが、こちらは形式名称をMS 06Mとして5機のプロトタイプに水流エンジンが装着された。

これらは北大西洋で潜水艦隊「シーサーヘント」に実験部隊として配備された。行動性は思わしくなかったが、データ収集の意味では、目的を果している。製作された7機のMタイプは、MSM 02からMSM 03の量産化で、任を解かれたが、大戦末期の地中海上陸侵攻作戦の折、胸に増加兵装としてロケットホッドをつけて参戦している。潜水艦へはほとんどバラバラに分散したため、各々の部隊カラーが施された。量産数が多いかのように誤解されるのは、このためである。



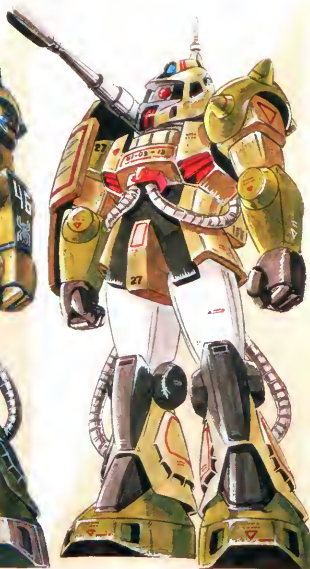
# HISTORY OF MOBILE SUIT

MS 06K サク対空砲装備型 MS-06M サク水流エンジン試験機

▼ グレーテン中尉機



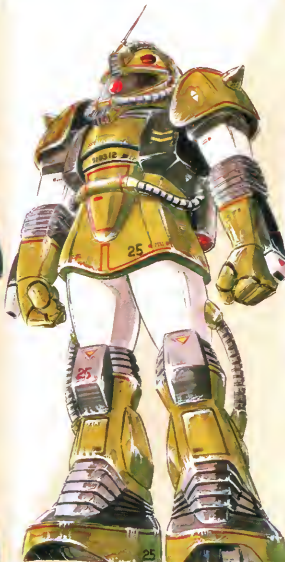
▼ MS-06K



▼ レッドドルフィン  
所属機



▼ MS-06M





MS-06D サクザン 新機軸

▼カラカル所属機

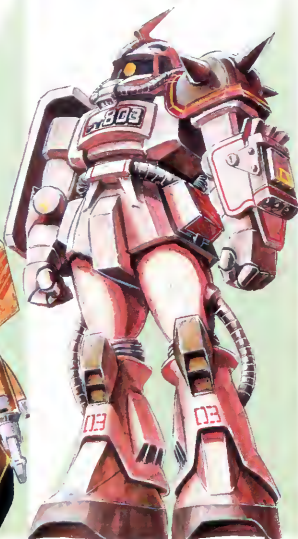
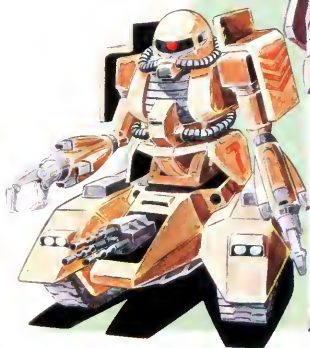


▼MS-06D

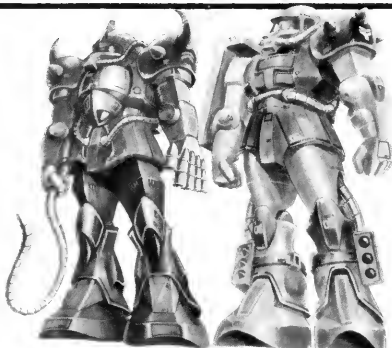


▼ピンクバンサー所属機

▼作業用ザクタンク



## MS-06ザクIIからMS-07グフへ



ルスーツの開発に着手する。軍が発注したプランはYMS 07とYMS 08として平行して試作がすすめられた。07は地上戦にラジエーターのパワーアップが計られ、格闘戦用に部分的に装甲を強化した。さらに移動力を補うために脚部には補助推進システムを追加している。08タイプは主に接近戦、ゲリラ戦を念頭において07以上の軽量化が計られた。

兵装は共に国定武装の増強が見込まれ試作された07の1・2号機は、左腕に五連式75ミリマシンガンを仕込み、右腕にはヒートロッドと呼ばれる伸縮式の一種のムチが装備された。

08では研究中の推進エンジンを背中に装着、短距離のジャンプ飛行が可能なる様に設計されたが、出力不足に悩まされ結局は07のプランへ統合という形で、5機が作られたにとどまっている。MS 07として正式承認を受けてからは、MS 06Jに代わる地上戦兵器として数々の改良が行なわれた様である。

MS 07通称グフは北米を皮切りにアジア方面に主に配備され、旧態からの

MS 06Jの生産ラインは途中から07へと切り換えになっている。MS 07は当初マシンガンとヒートロッドの生産よりも先行したため、固定武装を持たないタイプがある。このタイプはAタイプとして32機が生産された。同時期にランバル大尉が、ガルマ・ザビ大佐の仇討ち部隊として降りた時に使用したのは厳密に言うところ、量産先行型のYMS 07Bタイプである。これは標準装備型のMS 07Bと全く同じ物だが、チューニングは慎重に行なわれていたため、戦果ではかなりの好成績を納めている。

MS 07が成功をおさめたのは結果的な事だが、武装を固定化したため、かえって不便を訴えられたのも事実である。しかしながら予備装甲としてシールドを分離した点は評価されるべき物があると言えよう。基よりサク以上の装甲厚と機動力を持つためこの事は忘れられがちだが、装甲に頼る事が危険であるとして知っているパイロットにとっては、ドム配備後も強い人気を誇っている事から類推する事が出来る。

汎用兵器として限界点を見たMS 0

6に対してMS 07からは局戦用スーツとしての色がより一層濃くなつてゆく。MS 07のCタイプシリーズでは部分的なマイナーチェンジが次々と行なわれた。両腕をマシンガン付にしたC-1を初め、脚部の補助推進機を大幅に変更したC-4、特にMS 07シリーズ中でも異色の物は、一応C-5の名称で1機がつくられたにとどまっている物である。モニターアイのシステムは十文字型となり、固定武装としてヒートサーベルが装備された。実際の所、このタイプはジオン軍がYMS 09の開発に際してMS 07から近いデータを算出するために作ったものであった。

さらにMS 07の飛行可能プランとしてMS 07Hの名でつくられた物が存在した。これは07タイプの移動力をより高めるため、MS自身を飛ばしてしまふという物であった。合計4機が製作されたにとどまったが、実際短時間の飛行は可能として、種々の問題が存在した事は言うまでもない。このプランはトダイYSとのコンビネーションで昇華された。

## MS-09ドム

モビルスーツによって連邦に対し優位に立ったジオン公国ではあったが、成功作MS 06に過大な多用途を見出そうとしたため、地上戦において設計を新たにするモビルスーツの必要性は足早にやってきました

かねてよりMS 06に高性能を追求するためMS 07が誕生するまでになつていったが、陸上での移動力に難点が集中し、飛行可能なMS 07や、ドタイプYS等の対策が成された事は有名である

ここにおいてジオン軍が検討したのが陸戦用に最も要求された機動性を満たすホバージェット推進機を持つモビルスーツであった。白兵戦用に軽量高機動のRX 78を参考にザクを改良したのがYMS 08Aであったが、すでに却下となり欠番となつていたので、YMS 09の名称で試作が進行した

開発は全て新設計による物で、開戦から6ヶ月以上を数えてロールアウトした武装は重火器の使用が可能となり、専用兵器として三六〇ミリロケット砲と、M

S 07C 5にも装備されたヒートサーベルが与えられている。試作はジオン本国で行なわれたが、実際に完成した1号機、2号機は、直ちに地球へ降ろされて各種テストに使用された。最新鋭機として大きく期待された同機のテストには宣伝用フィルムのために数多くの將軍達が召喚されている。実用試験には1号機にフレデリック クランベリー大佐が搭乗して花を添えている。確認される記録では、1・2号機共に部隊マーク風に描かれているのは、式典に際してザビ家の命令によって施されたマーキングであったと言われている

続く量産型との差異はほとんどなく、外装上の整理が行なわれたにすぎない記録によると、YMS 09は2機にとどまり、数週間後に正式にMS 09として生産がすすめられた。

試作機はその後キャルフォルニアペーに引き渡されたままであったが、2号機はしばらくして熱帯戦用MS 09の研究母体として若干の改造を施された。アフリカ戦線におけるMS 09の活躍は実に目覚ましい物であったが、やはり局

地戦での使用に問題がなかったというわけではなく、現地からは改善要求の提出が少なからずあったと言われている

特に近距離用の通信アンテナと、頭部の放熱パイプ、背部推進機の形式は差し戻してYMS 09方式が採用されたということになる。地球上でのドム自体の配備にも時間がかったため、この熱帯戦用タイプの改修は正式承認以前の物としてキャルフォルニアペーが工作を代

行しただけの物であった。この仕様のオフショーパーツは、一部へ向けて生産が行なわれたが、実際に使用した例は10機に満たなかったと伝えられている。

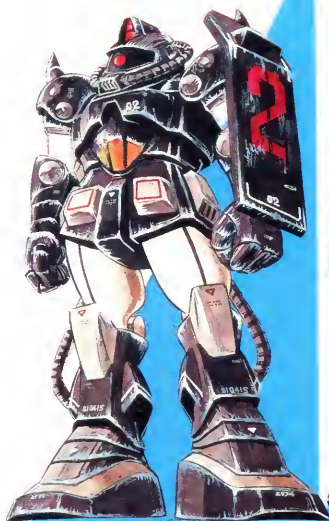
MS 09ドムは地上戦におけるモビルスーツの行動力を大きく変革した、局地戦用の要素が濃いにもかかわらず、地上の一般型モビルスーツとしてザクの存在を大きく退けた事は大きな事実であり、一応の頂点を見出したのである



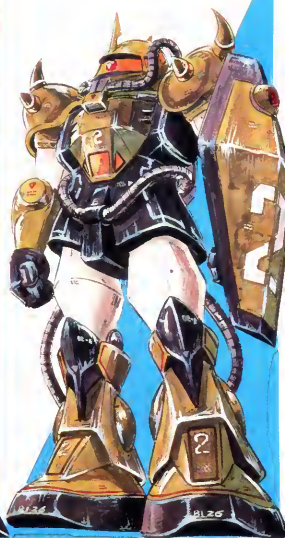
# HISTORY OF MOBILE SUIT

YMS-09 MS-07C-5 YMS-08A YMS-07

▼YMS-08A



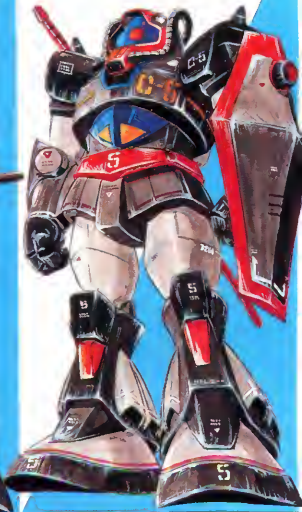
▼YMS-07



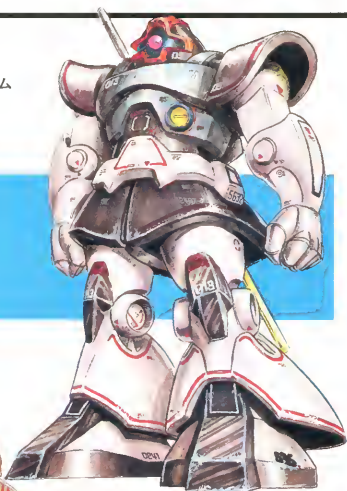
▼YMS-09



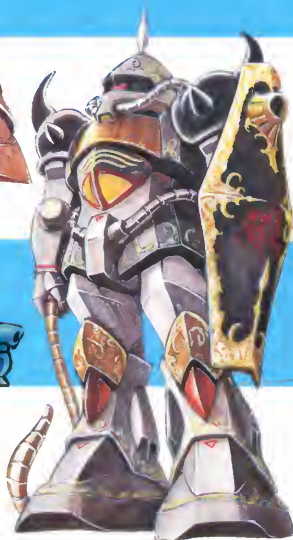
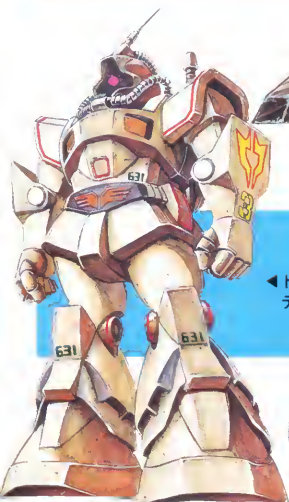
▼MS-07C-5



▶MS-09ドム



◀トロピカル  
テストタイプ



▶マクベ大佐用  
カスタムグフ

## ジオン軍モビルスーツ 開発の流れ

ジオン軍のモビルスーツ開発は、「S・U・I」プロジェクトに着手してから五年目にして、初の実戦型であるMS-05Aサクが完成した。この間は模索と苦闘の時代といえるだろう。MS-05は、さらに改良が続けられ、完全戦闘型MS-06ザクIIが誕生した。その中の三番目のモデル、Fタイプは、それまでのモビルスーツ開発の経験と技術の総決算だったといえる。

Fタイプの完成はジオン軍にとって、プロジェクト全体の開眼といえる。そして同タイプを原点として、次々とMS-06のバリエーションが誕生した。平時であるならば、より完成されたモデルへと開発が進むはずだが戦局の悪化は開発の方向を変えてしまった。ジオン軍部は日々変化する戦局に対応するため、Fタイプを起点とするバリエーション開発に固執してしまい、真に必要なタイプのモビルスーツの開発、実戦投入を遅らせてしまうという結果を招いた。

### MS-06F ドズル・ザビ中将機

宇宙攻撃軍司令部ドズル・ザビ中将の乗機は、MS-06FザクIIをベースとしたカスタムタイプである。基本的にはFタイプと変わらないが、徹底的なチューンナップとドズル中将の体格に合わせてコクピット容積の拡大、並びに両肩のアーマーを四本スパイク付きアーマーに変更されている。同時に武装として、特製の大型ヒートホークも製作されている。一般にこのような高官の乗機は、ステータスシンボルとして存在するのだが、ドズル中将の場合はルウム戦役のとき自らこのモビルスーツに乗り、戦場視察の名目で、個戦隊のモビルスーツを引き連れ実戦参加している。



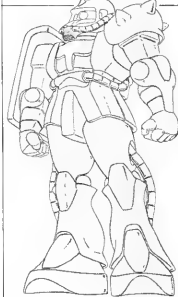
### MS-06FS ガルマ・ザビ大佐機

Fタイプは、Fタイプに10ミリマシンガン一門を搭載したタイプで、Fタイプの生産ラインから一定の割合いで生産されたといわれている。このタイプの機体はSタイプが登場するまでの間、部隊指揮官とか接近戦を主任務とする部隊に配備されたが、搭載されたマシンガンの効果のほどは期待されたほどではなく、あまり記録に残っていない。なお、高官の使用例としては、地球攻撃軍司令のガルマ・ザビ大佐が、チューンナップしたFタイプを持っていた。だが、ガルマ大佐自身は、ガウ攻撃母やドッグ制空戦闘機を多用していたこともあり、個人専用モビルスーツがあったことはあまり知られていない。



### MS-06GS シャア・アズナブル少佐機

Sタイプは、練度の高いパイロットの要請によって開発されたもので、Fタイプをベースにしたパワーアップモデルである。別名、指揮官用ザクと呼ばれるのは、Sタイプが主に部隊指揮官用に配備されたことからきている。Sタイプの特長は、Fタイプより30%も出力の高い、1エクラスの推進エンジンと2基装備していることだ。パイロットによつては、Fタイプの3倍の機動力を記録した例もあった。このSタイプを愛機としたエースパイロットには、「赤い彗星」として知られるシャア・アズナブル少佐がいる。彼がマークした戦果の大部分は、このSタイプを乗機とした時期に記録されている。



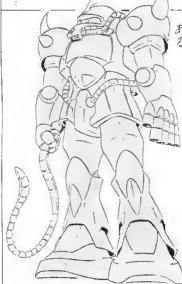


## MS-06W 作業用ザク

このタイプのザクは、ジオン軍型式番号記録に分類されていない型式である。とは言うものの、前線将兵は、一般にWタイプと呼んでいた。戦後の記録から確認する限りでは、大戦中期にアジア西部付近でこの作業用ザクを見ることができ、特徴としては、背部ランドセルを削除し、段式荷物デッキが新設されている。また、腕部に大型スコップやウインチも装備されていた。だが、全く同の外形を持つ機体が発見されなかったことで、おそらく地上での運動性能が思わしくなかった機体や、能力不全の機体を流用したものと思われる。流れるにはMS-06Vにつながるタイプであるが、かなりの機体が再武装され、戦闘に参加したものとされる。

## YMS-07B ランバール大尉機

ジオン軍は地球進攻にしかたがって、MS-06より自兵戦性能を強化した新型モビルスーツ、MS-07ザクを完成させた。Aタイプは、機体の生産が先行したことから固定武装を持たないタイプとして生産されたが、このBタイプでは当初の計画通りに、左腕に互連装置ミラシガンと右腕にヒートロッドを生産ラインを流用し、量産先行型のYMS-07Bをへて、完全量産型のBタイプが生産された。同機の使用例としては、量産先行型ではあるが、連邦軍新鋭艦ホワイトベースの追撃隊長ランバール大尉の機体がある。



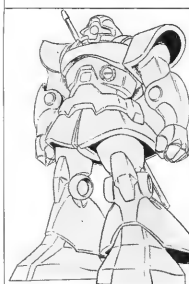
## MS-07C-3 グフ重装型

地球進攻が進むにつれて、戦局は多様化しそれまでの主力モビルスーツMS-06Jでは、状況に対応しきれなくなってきた。そこで登場したのが、グフのCタイプシリーズである。このタイプは部分的なマイナーチェンジが次々とおこなわれたことで、より、層局地戦用モビルスーツの色合いが濃くなった。その中で、C-3タイプと呼ばれる機種は、重装甲重武装で知られている。特徴としては、右腕のヒートロッドが廃止され、両腕に85ミリ互連装置マシンガンと頭部に30ミリマシンガン、両腕には予備マガジンがそれぞれ装備されていた。



## MS-09ドム 黒い三連星使用機

地上でのモビルスーツの移動力の低さを解決すべく開発されたMS-09は、熱核ジェットエンジンとロケットの複合推進機を装備している。また、それまでのモビルスーツ以上の重装甲と、新開発の360ミリジャイアントバズとの組み合わせで、重モビルスーツの名をはしりまにきた。このタイプの量産機を初めて配備された部隊は、黒い三連星で知られる突撃機動軍第七師団の特務小隊であった。彼らの得意戦法である、ジェットストリームアタックは、MS-09をして初めて地上でも可能となった。後にオデッサ作戦で、彼らとRX-78の対決は広く知られている。





# HISTORY OF MOBILE SUIT

## MS-06Fカスタム、MS-06FS、MS-06W

■MS-06FS

カルマ=ザビ  
大佐機



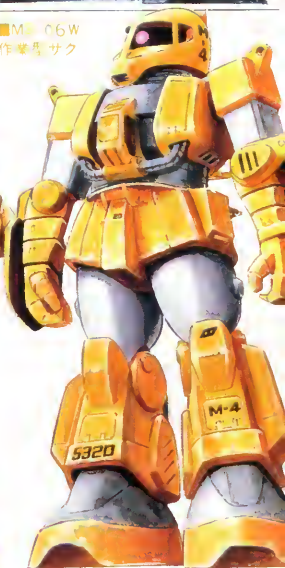
■MS-06F カスタム

トスル=ザビ中将機



■MS-06W

作業型サク

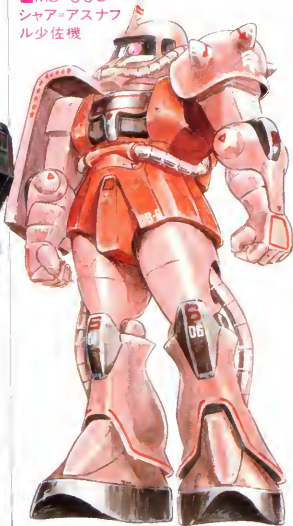


# MS-06S, MS-07C-3, YMS-07B, MS-09

■V  
へ 重



■MS-06S  
シャア=アスナフ  
ル少佐機



■YMS-07B  
ランバ=ラル  
大尉機



■MS-09  
黒二連星使用機



## ジオン軍の特務用MS

ジオン公国のモビルスーツコンセプトは、基本的にモビルスーツ単体に対して多くの汎用性を求めたため、用途変えのタイプに関してはほぼ新型をおこなねばならない実情に絶えず追われていた。よって国力の貧弱なジオンの体制としては、限られた基本から出る事なく種々の状況に対処しなければならぬ運命を背負っていたのである。

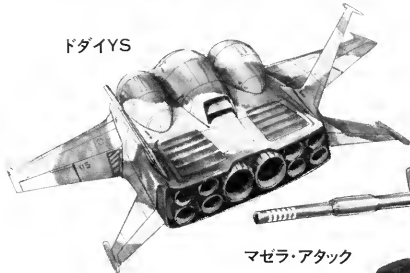
殊に連邦軍のコアブロックシステムの様なフランを当初考えられなかった事は、戦線の拡大化と膠着化に大きな影を落としてゆく事となり、限定使用の目的に対しては、基本設計をあらためる必要性が生じていった。第一の問題はモビルスーツ機動部隊の移動力である。地上侵攻作戦において、ザクにある程度の見切りをつけたジオン軍部は陸上戦用にMS-07を開発し、各地への実戦配備がすすめられたが、この時点でも走行速度に制圧区域の拡大が進めにくかったのは事実である。ジオン兵器開発部で提案されたのは、モビルスーツ自体に飛行能力を持たせる物であった。このフランには当然無理が生じたのは明らかであり、局地戦用に開発配備されていたドダイにモビルスーツ搭載性を持たせる事で徐々に改善されていった。移動力の問題は憂慮された期間が比較的

長かったが、MS-09タイプの開発によってほぼ9割は実戦投入と同時に解決を見たと言える。

もう一方は量産ラインの生産性の問題がある。本来モビルスーツの効用は戦闘時のみの物ではなく、作業性の面も比率としては大きい。ザクによるザクの運搬や整備は当然の事であり、人間型の拡大は伊達ではなく、ザクに搭乗しての一〇mmマシンガンの独自分解、整備、組み立てさえ可能であった。但し先述の様に生産率の低さから最前線へあまねく兵器が送り込まれるという事もなかったわけである。そこで現地案の吸収によってザクの上半身を利用してマゼラアタックと簡易に組み合わせた作業車輛が製作された。実戦時に使えない事もなかったが、主に工作用、作業用車輛としての有効性を示した。ザクタンク自体も使用不能となったモビルスーツの再利用だが、逆に回収車として大いに貢献した様である。

戦闘用特殊MSとしては、ジャブロー攻略のみを目的として製作されたアッグタイプと呼ばれる物がある。これは兵装と機能を分担し一用途のみのスーツ3種をチーム化して使用する。先峰として掘削用が道を開き、重火器で強行、格闘戦用スーツが白兵戦にのぞむという極めて限定された用途による物であった。アッグタイプはその極端な例だが、水中戦用、水陸両用、湿地帯用モビルスーツの後期の使用目的は、ほぼジャブロー攻略に基づく物であり、大戦末期における地上戦用スーツは、各地での使用に方向性を限定していたと言える。

ドダイYS



マゼラ・アタック



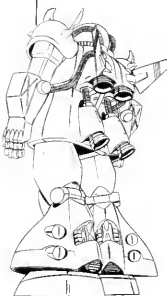
## MS-06E ● 強行偵察型

初期からの宇宙空間戦には、MS-06タイプのみでの戦闘展開が進められた。ここでMS-06タイプの機動力を利用して、戦略偵察機への転用が考慮された。装甲性はほぼ同じであるため、実際に探知システムの交換性を高めて設計した場合には、偵察型の即時武装化も可能であったからである。MS-06Eとして承認されたタイプは、通常のCタイプやFタイプから兵装に必要な部分を極力削除し、燃料スペースを10%増加し、機体各部に探知システムを装着した物である。頭部モノアイは、接近戦用のカメラを大口径の高精度タイプに換装し、ガラスシールドの廃除とモノアイケージの縦ロー化も可能としていた。新設置のカメラは、両肩に1基ずつさらに腰の関節ブロックを前方へ延長しカメラを収納していた。メインのロケットバーニアに加えて、機体左右胸部には緊急離脱用ロケットが装着されており、この部分が通常の06と異なる部分であった。さらに大戦中期には頭部カメラを3基にして、背部に折りたたみ式複合探知システムを装備した改良型MS-06E-3も16機が作られている。ブームの形状から「フリッパー」の愛称で呼ばれた。



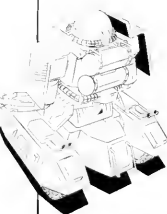
## MS-07H ● 飛行試験型

地上戦用モビルスーツMS-07は、MS-06Jに代わるべく生産と配備が行なわれたが、移動力を向上させるためモビルスーツに飛行能力を与えるプランが配備とほぼ同時に提案された。推進システムは脚部を中心に強化され、背部のロケットバーニアに加えて腰にも同様に2基の推進機が設けられた。量産先行型のYMS-07A3機とB1機は直ちに仕様を統一し、計4機はサイド3での改修作業を終えてアリゾナのフラットネイル基地へ運ばれてテストを開始、航空機部門からビリー・ウォン、ダイク大尉をチーフとして6名のテストパイロットチームを編成して4週間の準備期間内に4機総計で38回のテスト飛行が行なわれたと記録されている。その後YMS-07Bをベースとした4号機は、脚部推力を増強し、機体肩の装甲を整流効果上形状変更し、腰にはベントラルフィン設けたMS-07H-4として改造された。但し出力アップはしたものの、換装したエンジンのトラブルが続く。テスト開始後10日目にテストパイロットのフランク・ベルナル少尉を乗せたまま空中爆発で同機は失なわれている。



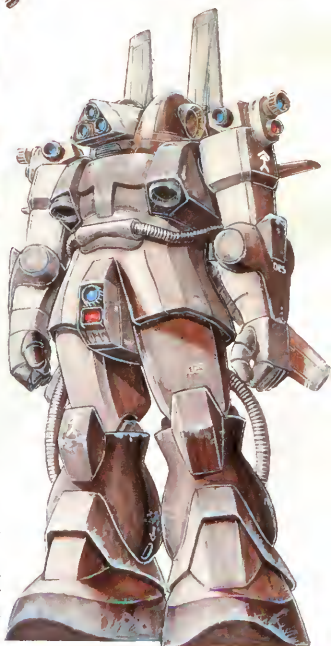
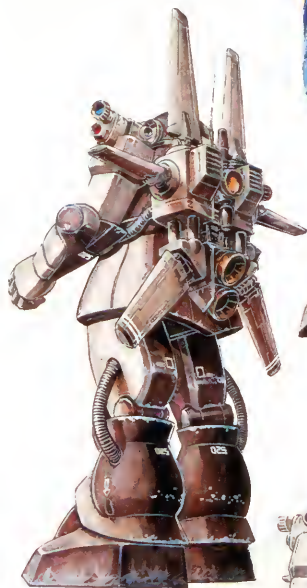
## MS-06V ● ザクタンク

モビルスーツの戦場での作業性は、ザクによるザクの回収、整備、またマシンガンの分解、整備、組み立てまでが可能である程の物である。但しモビルスーツの生産性と戦場への輸送は机上で考えられる物ほど甘くはなく、実際にはモビルスーツによる侵攻が激化してからは、単に戦闘のみに振り向けられるという状態であった。戦闘能力の欠如したモビルスーツの再利用は戦場からの提案によって有効な物となる。モビルスーツのいわゆる「腕」の効用を活かした作業車輻である型式番号を一応順当にMS-06Vとしてはいる物の、内容はマセラベースの上へザクの上半身をのせるだけの物で、操縦スペースを無くして腰の可動ユニットを設けただけの物であった。試作という程の事もなくアフリカ戦線において作業中隊の現場改造でこの組み合わせが行なわれた。ザクタンクの愛称による同機は全て「再利用」の形で生産され、工作作業に有効性を見出すかわら、一部武装して陸戦オペレーションにも参加している。マニキュレーターは様々な物が装着され、名称別に正式に分けられるという事もなかった様である。



# HISTORY OF MOBILE SUIT

MS-06E ザク強行偵察型



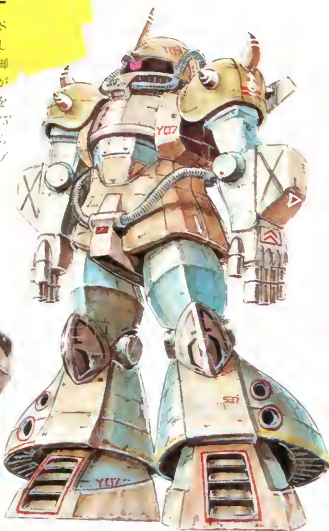
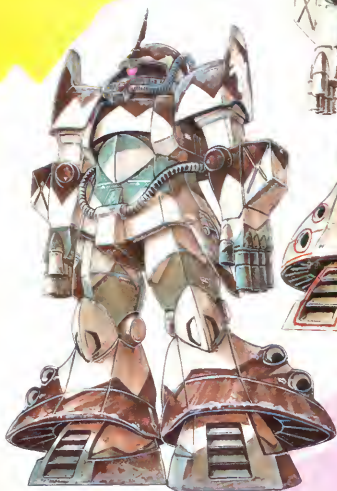
▶頭部メインカメラを3基とし、背部に複合探知システムを設けたMS-06E-3 大戦中期から通常の偵察型Eタイプを改修し、総数16機が生産された。

背部の探知システムは平常時にはすべて後方へ向けて折りたたまれ、タンクとブースターをオフショで装備する場合もあった。「フリッハー」の愛称で呼ばれ偵察行動に従事したが、実際に有効性の見出さる状況自体が減少していた。

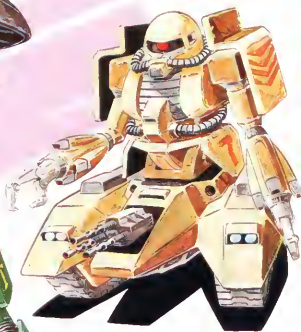
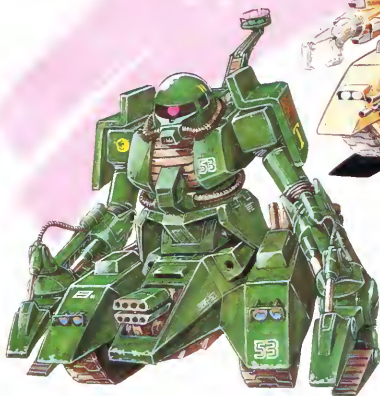


## MS-07H グフ飛行試験型

▼試作されたHタイプ4機の内、YMS-07Bをベースとした物をさらに改修した性能向上型MS-07H-4タイプ。脚部の推力を増強し、外見的にはフレアが大型化している。肩の装甲は整流効果を考へて形状変更され、左右腰側面には75°可動のペントラルフィンが新たに設けられている。同機はテスト10日にアリゾナにおいて事故で失われた



## MS-06V ザクタンク



◀作業用マニピュレーターを大型化したMS-06V-6。作業等はザクの歩行システムをフルに活用するはずだったが、再生産の有効性からこれら変形型モビルスーツは、戦場での各種作業には比較的に有意義な存在であった。

## MS-14ゲルググ



ジオン軍のMS技術は連邦を10年上回るとさえ言われたが、RXスーツのビーム兵器標準装備化は、ジオン公国にとって大きな驚異であった。MS 06を継承する第2期主力モビルスーツはジオン国内で設計がすすめられたが、宇宙戦での急場しのぎには、MS 09の改造型であるMS R09通称リックドムが採用された。競争相手であったMS 06 R2は、結局のところ総合性能にやぶれたが、主力モビルスーツとして開発中だったMS 11の基本は、MS 06 R

2から得たデータによる物であった。MS 11の目差す性能は、連邦軍のRXスーツに見る機能を踏襲する所が実に大きい物であった。第一の目標は、ビーム兵器の標準装備化であった。但しこれにはさすがのジオン軍も多大な時間を奪われており、ビームライフルの実用化は機体完成より約3ヶ月も遅れている。ビーム兵器実用化の目度が立った時点で、ジオンのモビルスーツ戦コンセプトは完全に連邦軍化する。白兵戦用MS 15（仮ナンバー）と共にMS 11は、形

状こそジオン公国と判別出来るものの、運用面ではRX 78スーツと何ら変わる事はなかった。

第2期主力モビルスーツ構想におけるもう一方の特徴は、MS 07で見せた装甲システムの分離であった。連邦軍のモビルスーツ量産に伴ない、MS戦がより白兵戦化して行く事を予想し得たからに他ならない。MS 11は、他の宇宙戦用特殊モビルスーツにナンバーを移すため、MS 14と名称を変更されている。

ここでジオン突撃機動軍が編成を要請したのは、明確化しつつあったニュータイプパイロットを含むエース部隊の編成であった。少数精鋭による敵モビルスーツ部隊撃破の構想は、まもなく具現化された。

YMS 14としての初期生産型の内24機はパイロットに応じたチューニングが施され、増速用ブースターと、ビームキヤノンハックが用意された。前者は高機動型MS 14Bとして、後者は重火器支援型MS 14Cとして限定数で承認された。召喚されたエースパイロット31名は旗艦「キマイラ」（ザンジバル級）を中心

に主にコレヒドールの暗礁空域で実動テストを繰り返した。決戦に備えて待機していたパイロット達は結果的には、その後間もなくア・バオ・クーの攻防戦に参加しなければならなかった。召喚されたパイロットの中にはJ・ライデン少佐、トーマス・クルツ少尉、J・サカイ大尉も居たと伝えられる。

MS 14は一般用AタイプとしてMS 15を退けて生産ラインに入ったが、宇宙空間戦だけでなく、地上戦も考慮して作られたモビルスーツであった。そのため大気圏内での機動性を考えて、両腕にはジェットエンジン補助推進システム。またエース部隊へ配備されたMS 14Cも、同様に地上戦を充分に考えて作られたタイプであった。

結局のところMS 14Cタイプは15機にとどまり、MS 14全体の七三八機中一二二機分のCハーツが用意されつつあったが、終戦を迎えたところでストップとなっている。その裏づけともなるMS 14Cの性能評価は高く、最大兵装時には三六〇ミリロケット砲二門の使用も可能であった。



# MS-06Zから MSN-02ジオングへ

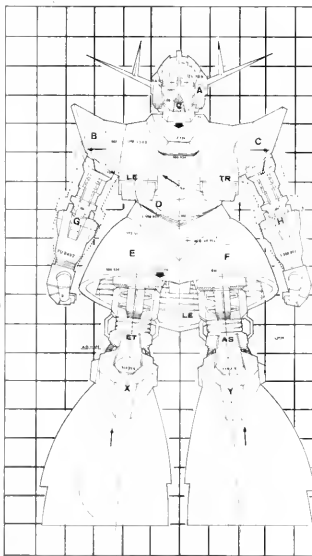
MS-06ザクIIシリーズは数々の局戦用派系型、研究母体を生んだが大戦終結2ヶ月前よりザクの派系最終型の設計提出が行なわれていた。サイコミュシステムを使用するMS-16タイプの基本となるデストベース機である。MS-06Zの開発名称を与えられた本機は、両腕に5連装ビームライフルを有線ケーブルを含んで装備する事が第一に課せられた条件であったが、有線ビーム砲の小型化が効かないため、通常のザクの腕の部分



に巨大な腕が代わりに付く形となっていた。高機動戦闘によるサイコミュオペレーションのデータを必要とするため、機体はMS-16の基本フォルムを縮小してザクの各所に大出力ロケットエンジンが装備された。極秘にテストにまわされたのは3機のZタイプで、コードネーム「ビショップ」で呼ばれた。Zタイプは陸戦用の脚を持つが、製作された3機の内2号機には加えて改修が施され、腰内部より下の歩行ユニットが

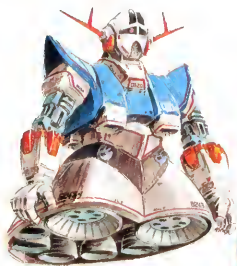
取りのぞかれ、代わりにむき出しで4本を一本にまとめた大ロケットエンジンを2本計8基のエンジンを搭載したモビルアーマー並みの機動力を持つタイプへと生まれ変わっている。但し試験時のわずかな時間のみの使用に耐える物で、燃料搭載量の割には、一般的とは言えなかった。MS-16の名称変更時に合わせてMSN-001の名称が与えられている。MS-16として製作がすすめられたモビルスーツは人型モビルアーマーとしての要素が濃く、次代をになうニュータイプへのさきがけとして期待を背負った、

「ジオング」の名称が付けられた。本機は移動に足が必要としないため、スカートを大型化し、大推力エンジンを集中して装備していた。装甲も完全でないまま、ア・バオア・クーの工場施設で工作調整が続けられていたが、最終戦への突入によって稼働状態までこぎつけた段階でシヤア・アズナブル大佐が使用、RX-78を撃破にまで追い込んだが、工場に工作中的の歩行ユニットと2号3号機を残したまま大破消失している。MSN-03ジオングでは、脚も含めて7ブロックから成るオールレンジ攻撃も計画されていた



# HISTORY OF MOBILE SUIT

MSN-02

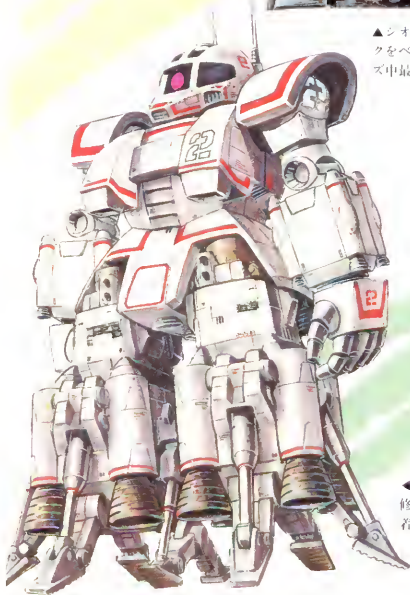


▲ゼロサイコミュシステムを導入した人型モビルアーマー。脚は不用ともいえ、機動性は高かった。

MS-06Z



▲ジオングのテストベースとしてザクをベースに改造した物。06シリーズ中最も原型と異なるタイプ

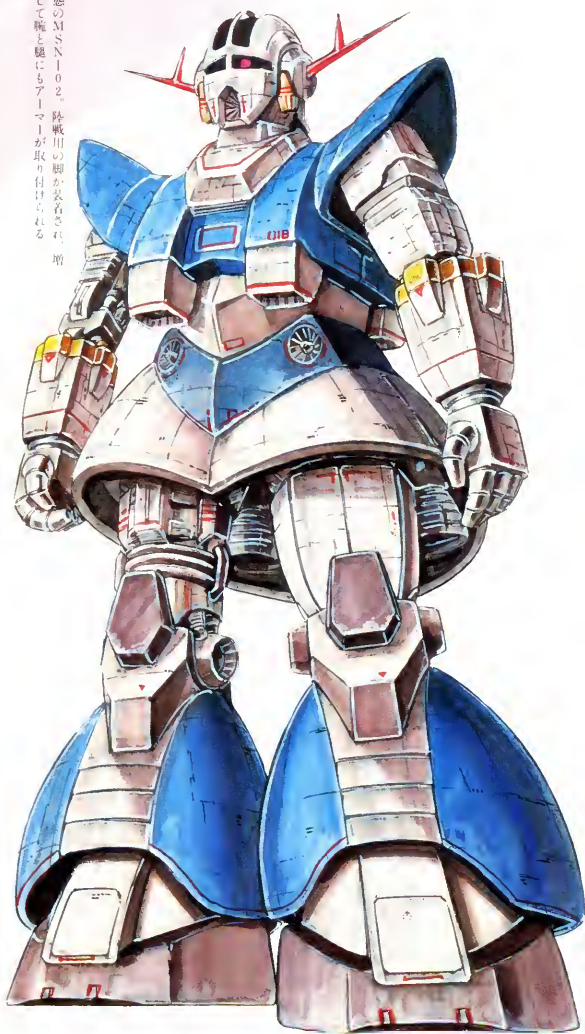


MSN-01

◀Zタイプを基本に2号機を改修した高機動型。脚は固定で降着用のフレートギアを使用する

MSN-02 陸戦用歩行ユニット装着オペレーション

▲完成状態のMSN-02。陸戦用の脚が装着され、増  
加装甲として腕と腿にもアーマーが取り付けられる



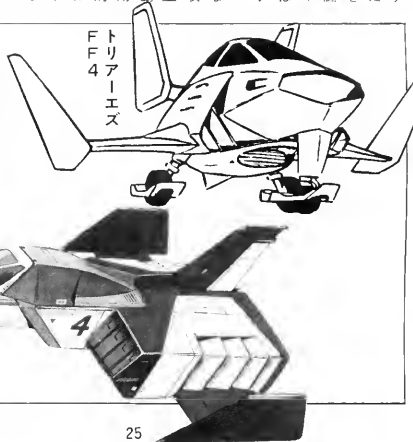
## コアファイターの開発と連邦軍MSの誕生

地球全域が連邦化されるまでに幾多の戦争が積み重ねられ、兵器開発は二十世紀後半より限界点を迎えた。航空機開発上の技術的問題は、電子兵器戦では頂点に達したまま約三十年もの歳月を数え、連邦政府に統合後も在来の軍事統合系統は、ほぼ旧態のまま用いられていた。

連邦軍の軍備は航空機を主体とする物であったが、旧態の勢力均衡の産物たる監視衛星の残留により、大気圏内用航空機には新機軸等の研究は成されず、二十世紀末に見られた程度に留まる物であった。しかしながら宇宙空間への軍備拡張は、大戦艦主義と附随して戦闘機の開発が行なわれた。先行した戦艦の建造による行動半径の拡大化は、燃料消費量の多い戦闘機にとっては、この上ないホームベースとなる。連邦軍には軍事メーカーとしてハービック社とウィックウエリントン社が対峙していたが、統合後の経験の浅いハービック社は軍部から比較的冒険度の高い実験機の要請が多く、各方面での再確認の内容を持つ機体を次々に製作して行った。

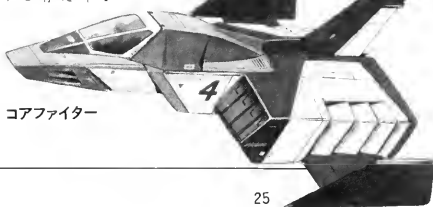
在来型の戦闘機は、航統距離の短かい物を主体として局地戦闘機に重点が置かれていたが、宇宙戦での対応と

予測される範囲での防衛力として、大気圏内外で近接する空域で最も戦闘力の高い機体へ観点は移行していったのである。ここでハービック社の新用途戦闘機は段階を四つに分け、高々度戦闘機、小型戦闘機、空間戦闘機、空間戦闘用攻撃機F F S 3 セーバーフィッシュは開発を順当に終えたが、高々度戦闘機のエンジントラブルをかかえたまま、ジオン公国の奇襲作戦が開始され、各サイドに駐留する艦隊は、わずかの内に全滅を余義なくされた。モビルスーツに関するデータを少しずつ回収した連邦軍は、プロジェクトチームを編成し、続く地上部隊侵攻に対してモビルスーツの開発に着手した。移動システムは、重量配分を考慮してキャタピラ走行を採用し、ミノフスキー粒子による干渉をさける事を第一目的としたコンピュータシステムの開発が並行して行なわれた。さらに学習機能を持たせる事によって、交戦データの処理を行ない、短期間での戦闘力の向上にも努められた。そこでこの新技術を敵と交戦した際も回収、かつハイロケットの保護にも能力を発揮する物として考案されたのが、コアファイターである。開発途上にあったF F 1 6 とF F 1 7 は、このフランヘ統合され、モビルスーツのコクピットと共通となるブロックシステムへの変形機能も与えられた。F F 1 7 の要請内容はあきらめられていたが、行動半径は別として格闘戦性能は良好なため、通常戦闘機としても採用された。



トリアーエズ  
F F 4

小型局地戦闘機トリアーエズF F 1 1 とコアファイター。F F 1 7 としてなら同時期スタートだが、コアファイターには異なる存在意義があった。両機にはハービック独特のデザイン言語を見出す事ができる。



コアファイター

# RGC-80 GMキャノン

RX 78と同時にテストへまわされたRX 77とRX 75の内、実用本意で量産化が見込まれたのは、RX 77通称ガンキャノンであった。このタイプのRX 78とのコンビネーションは、運用を机上で考えていた時よりもはるかに好ましく、またRX 78との連携によって本来の存在意義を見出す結果となった。実用試験のためサイド7へ運ばれた77タイプは2機、予備として1機分のパーツが用意されたが、母艦となる最新鋭戦艦ホワイトベース級ヘガサスの入港当日ジオンパトリール部隊から3機のザクの奇襲を受け、1機を除いて消失している連邦最大の拠点であるジャブローでは、すでに簡易量産型モビルスーツとしてRX 78を基本にしたRGM 79を製作、RX 77は4機を残したまま量産はされなかった。しかしながら本来のRXフロジェクトであるコアを中心としたモビル

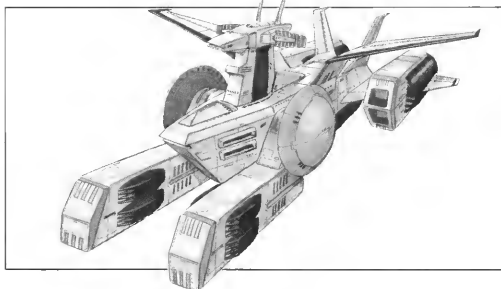
スーツの多用途変換構想は77タイプをさらに簡略化する事で残っていたのである。脱出システムを廃止する代わりにコアフロックの機能を残し、上半身だけをキャノン砲装備の中距離支援型にしてしまおうという物である。ジャブローで製作されたキャノン砲装備のGMは、両肩に三六〇ミリロケット砲を積んだ77タイプとほぼ変わらない物だったが、低反動とは言え重量バランスや安定性に問題が生じたのは言うまでもない。

三六〇ミリロケット砲はその後すぐに改良され、砲身を延長、弾の装填をマガジン式に改めた物が機体の右側にだけ装着された。これによりRGM 79と部の品共有度は60%になったため、量産化に幸いした。生産型はRGC 80GMキャノンとしてRX 77ガンキャノンを継ぐ物となったが、地上戦での安定性には依然不満が残り、ヒザから下に改修が施された。基本的にはRX 77と同じ仕様による物で、実戦時の装甲交換性を考慮して、左右分割方式がとられている。

RGC 80GMキャノンの武装は、頭部の60ミリ機関砲、右肩の三六〇ミリロ

ケット砲が標準の他、RGM 79同様ヒームスフレールカンの使用が可能で、宇宙空間戦での最大装備時にはバルザック式三八〇ミリロケットバズーカを使用する事が出来た。また77タイプからの引き継ぎで中距離射定のヒームライフルの標準装備化も進められたが、結局77タイプと同仕様の物が5機分作られただけで、実戦配備には間に合わなかった様である。ジャブロー内の工場で作られた一号機は頭部を77タイプのまま、RGM 79のボディに左右2門の三六〇ミリロケット砲が設けられたが、背部ユニットはブロック構造に変えられている。ロールアウト時には77仕様の塗装が施された。試作2号機以降は全て下半身の改造が施され各戦線へ配備された。RGC 80の総生産数は大戦終結までに48機を数えるにとどまっている。内ティアンムの主力艦隊と共に宇宙へ上ったのは14機、北米地域には、RGM 79隊と共に6機が送られた。さらにアフリカ戦線には19機が配備された。大戦後の記録でア・バオア・クー戦におけるRGC 80の活躍はあまり見られないが、その大多数がジオンの

ソーラ・レイシステムによって散った事は想像に難くない



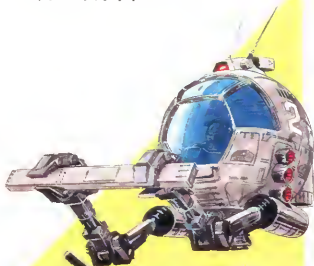
# HISTORY OF MOBILE SUIT

RX-78-1ガンダム RMV-1ガンタンクII

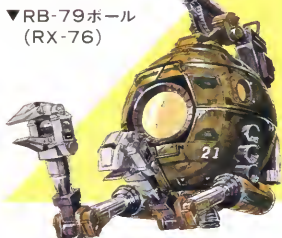
RB-79 ボール(RX-76) スペースポッド

▼スペースポッド

▼RX-78-1



▼RB-79ボール  
(RX-76)



▼RMV-1





## RGM-79GM RGC-80GM キヤノン

### ▼RGC-80

1号機及び一般塗装

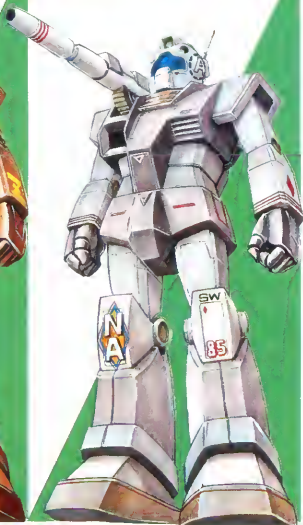
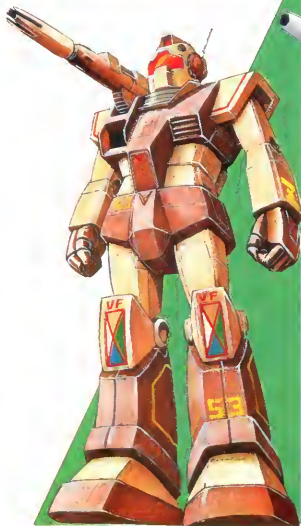


▼アフリカ戦線

### ▼RGM-79一般塗装



▼北米戦線





## Gアーマースystemと コアブースター

RXスーツの最大の特徴は、脱出システムと操縦システムを一体化した事にあったが、換装を目的とした構造設計は、その後の連邦軍の兵器開発に大きく貢献した。大型揚陸艦として母艦となるホワイトベース級との並行開発によって、モビルスーツの攻撃能力は大きく裏付けられたが、単体での移動性には問題があった。ビーム兵器を標準装備化しているため、エネルギーの消耗率が高く、機体の軽量化に重点が置かれていたためロケット燃料の搭載量が比較的少なかったためである。

モビルスーツにするために、脱出システムとしてコアファイターを内蔵したRXスーツであったが、先述の移動力を補う手段として連邦軍が出した解答は、RXスーツ(RX-78タイプのみ)にさらに飛行用ユニットを設けるという物であった。RXスーツの実用試験が終了し、実験部隊がデータを出してから急造されたこのプランは、コアファイター、Aパーツ・Bパーツを個別に考え、同規格の換装部分をフルに活用する物である。すなわち、コアファイターを基本として操縦系を持つ中距離支援用戦闘機が2機種。これはBパーツをくるむ形のメインエンジンユニットを、ブースター的に使用し、Bパ

ーツを装着したままコアファイターに操縦系を移す物とコアファイターを直接装着する物である。

Aパーツにはカバリーユニットがかぶり、独立した降着装置となるキャタピラタンクを前へ移し、カバリーのビーム砲を使ってタンクにする物も2種考えられた。(コアブロック有と無で2種) また飛行ユニット全体も独立して支援用攻撃機として、さらに中間にRX-78を包む形で飛行が可能であった。個別名称はGパーツと呼ばれ、RX-78を入れた状態ではGアーマーと呼ばれた。

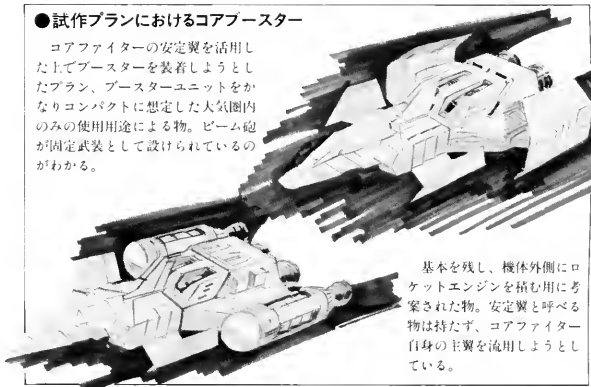
試作されたパーツは2機分、半端実験部隊用に製作されたものと同じである。

コアファイターの戦闘機としての能力は意外にも高かったため、Gパーツでは支援用戦闘爆撃機化が設けられたが、コアファイターをより有効に使用するために、飛行用ブースターが別設計された。コアファイターを操縦ユニットに流用するのはRXスーツと同じだが、こちらは純粹な戦闘機としてのオペレーションである。コアファイターの後部に大型のジェット・ロケット兼用エンジンを配し、固定武装としてビーム砲が設けられた。

運用は大気圏内外両用で、大戦末期から実戦配備が行なわれ、地上での有視界航空戦でも多大なる戦果を示した。宇宙空間での使用のみで設計が開始されていただけに、空間での使用も良好で、支援の役割をうまく果たすと伝えられる。本機は終結までに16機が生産され、6機が実戦参加している。

### ●試作プランにおけるコアブースター

コアファイターの安定翼を活用した上でブースターを装着しようとしたプラン、ブースターユニットをかなりコンパクトに想定した大気圏内のみの使用用途による物。ビーム砲が固定武装として設けられているのがわかる。



基本を残し、機体外側にロケットエンジンを積む用に考案された物。安定翼と呼べる物は持たず、コアファイター自身の主翼を流用しようとしている。

## 増加武器によるガンダムの強化計画

「A A」として進行したRXスーツを中心とした連邦軍の軍備は、モビルスーツの大量生産と、高性能化であった。「V作戦」の中からは、上層部が期待したニュータイプ覚醒が見られ、その能力増大に伴わないモビルスーツ自体の運動性能に改善が要求されていた。

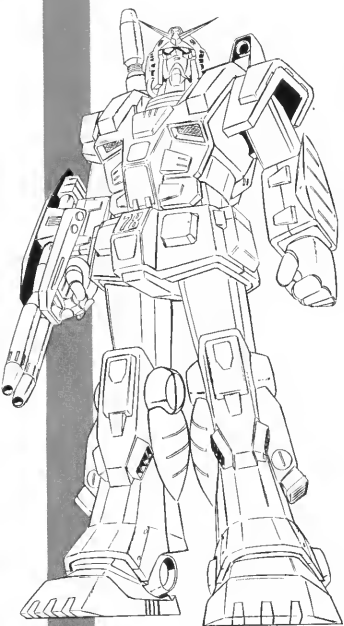
大戦終結の兆しが見えてきたところで、連邦軍で計画がすすめられていたのはRX-81とRX-78タイプ用の増加ウェポンシステムであった。ウェポンシステムは、現存するGナンバ機分だけ製作し、特殊パイロットを集めて編成する物であった。RX-81とは、段階としてニュータイプパイロットが使用した時の78タイプを目安に、機動性と武装を強化するという物である。基本的にはこのタイプがRX-78の完全量産と呼べる物であり、RGM-79を量産型の78と判断するのはいささか疑問である。事実上ごく一部の人間の間でしか知られずであり、企画案もコード名だけが先に通ってはつきりした78の改修部等の指示はなかった。またRX-81に関しての外形とスペック、運用面での特徴は記録が残っておらず果してどの程度まで研究が進められていたかは定かではない様である。

計画案として実動寸前にあった増加ウェポンシステムはFWSWSのコードで呼ばれ、装着状態のRX-78は、FA-78-1の呼称が与えられる予定であった。パーツは比較的装甲使用度の高い部分に設置され、胸、肩、腰、腕、脚にRGC-80と同様に簡易装着型として設計がすすめられていた。

武装は、背部パーツに一体化してロケット砲を装備し右腕には二連装ビームライフル、肩と膝にはミサイルベイが取り付けられる様になっていた。機動力を補うために、背部と脚部には補助推進装置が用意され、この計

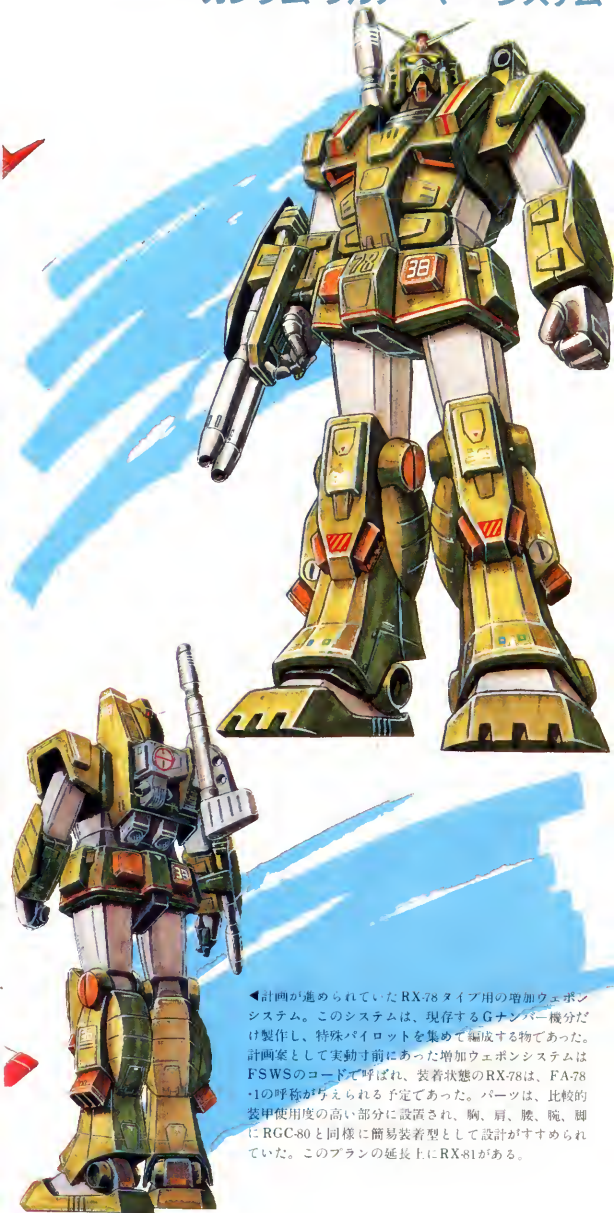
画案には両腕、両足のシステムの違う物も用意されていた。脚部にはコアブラスター並みのロケットエンジンを付け、緊急時には脱離、両腕には固定武装でビームサベルが一体化されるというプランである。

RX-78ガンダムは終戦を迎えたため、本来の満足の行く性能を充分に発揮できたとは必ずしも言いきる事はできない。増加ウェポンシステムは、重量が倍加するため実際の効力については何とも表現しかねるが、このプランの延長上にRX-81のある事は刻んでおきたいところである。



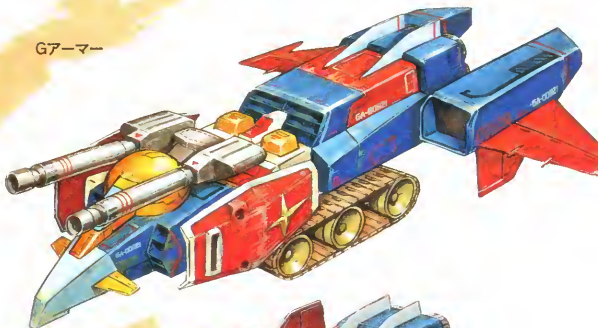
# HISTORY OF MOBILE SUIT

## ガンダム・フルアーマー・システム

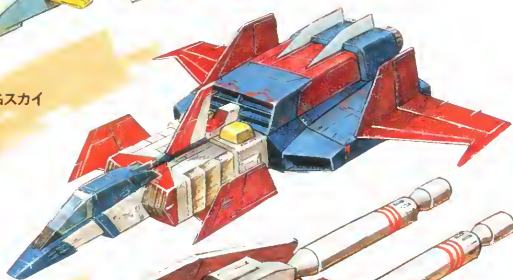


◀計画が進められていたRX-78タイプ用の増加ウェポンシステム。このシステムは、現存するGナンバー機分だけ製作し、特殊パイロットを集めて編成する物であった。計画案として実動寸前にあった増加ウェポンシステムはFSWSのコードと呼ばれ、装着状態のRX-78は、FA-78・1の呼称が与えられる予定であった。パーツは、比較的装甲使用度の高い部分に設置され、胸、肩、腰、腕、脚にRGC-80と同様に簡易装着型として設計がすすめられていた。このプランの延長上にRX-81がある。

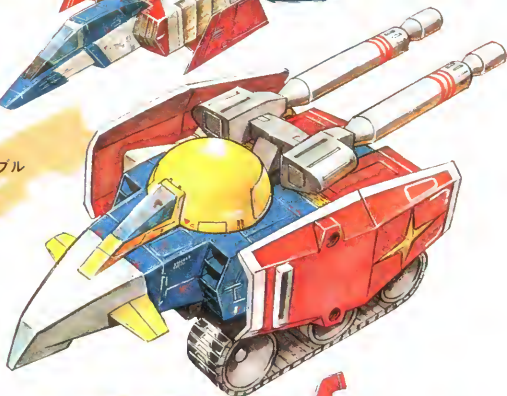
Gアーマー



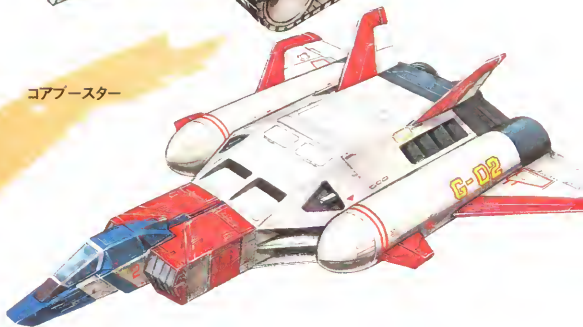
Gスカイ



Gブル



コアブースター



## ホワイトベース級 宇宙攻撃空母

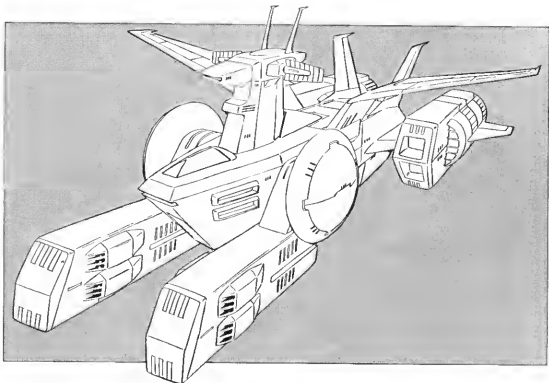
連邦軍の最新鋭艦で、V作戦の一翼をになっているのが、ホワイトベース級宇宙攻撃空母である。もともと連邦軍の宇宙空母建造計画は、かなり古くから議論されながらも正規空母は、本級が建造されるまで実施されることはなかった。以前にも連邦軍はトラファルガ級の宇宙空母を建造したことはあるが、これはマゼラン級宇宙戦艦の艦体を流用して両舷に開放型の全通フライトデッキを取り付けたものである。艦載機数は、トマホーク型空間戦闘機十二機あるいは、バブリク級宇宙艇六隻であった。格納庫は持つておらず、艦載機運用能力はかなり制限されていた。トラファルガ級は合計八隻建造されたが、正規空母には分類されずに全通甲板型支援巡洋艦とされていた。このほかにも改コンロンプス級（アンティータム級）補助空母二十四隻が、戦時中に建造されている。つまり、ホワイトベース級は連邦軍にとって、正規空母として計画され建造された初めての艦といえる。

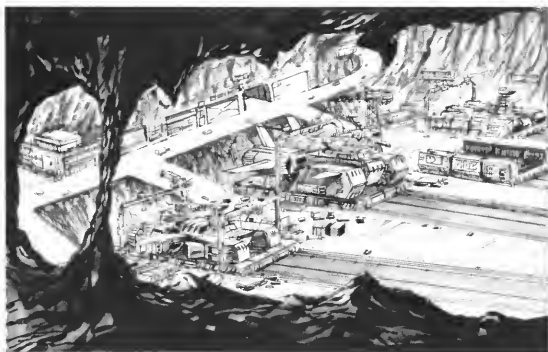
計画立案当時は、SCV-Xのコードネームで呼ばれていた。もちろん艦種は宇宙空母であった。幾度かの設計変更のすえ、SCV-27計画として連邦議会の承認をえて、細部設計の段階へと入っていった。戦後公表された資料によると、大艦巨砲主義に固まっていた議会を説得するために、一時艦種を艦載機を多数搭載した戦艦としていたのが面白い。この

段階で予定されていた艦載機は、ハービック社製のFFS-3セイバーフィッシュ十二機であった。

ホワイトベース級が実際に建造開始されたのは、開戦前年で三隻同時にジャブローのAブロック船台であった。だが、間もなく起った今次大戦で、ホワイトベース級は大きく変わっていった。ジオン軍が使用したモビルスーツに対抗するべく開発が開始されたRXモビルスーツ（正確にはRX-77、78）の母艦として、再度設計変更が加えられたのである。そしてSCV-27計画はV作戦に統合され、以後最高軍事機密のなかで建造が進められた。艦種もRXモビルスーツ用強襲揚陸艦へと変更された。もともと艦種分類は、一番艦が就役するさいに、正式に宇宙攻撃空母となっている。たび重なる艦種変更により、人によって本級が戦艦とか強襲揚陸艦と呼ぶのはこのためである。計画順では一番艦にベガス（SCV-69）ホワイトベース（SCV-70）の順で完成するはずであったが、実際にはホワイトベースの方が早く完成し就役したので古来の慣習により、本級のネームシッフとなった。三隻目は一番艦の武運にあやかり、ホワイトベースJr.として完成したが、終戦時に一番艦ホワイトベースが戦没したので、救出された乗員によりホワイトベース二世として就役している。

四番艦からはフライトデッキ、ハンガーデッキを大巾に拡大し、より多くの艦載機が運用できるように設計変更がされている。外観上、かなり変化しているのに人によっては、改ホワイトベースとか四番艦名からサラブレッド級とも呼んでいるが、連邦軍宇宙艦艇年鑑では、特に新しいタイプへ分類されていないので、四番艦以後を強いていうならば準ホウ





イトベース級と呼ぶのが正しいだろう。理由としては、三隻計画された艦はどれも同型ではなく、三者三様の外観と運用方法をしていitことがあげられる。なお共通している点は、一―三番艦の特徴であった主砲とビーム砲を廃し近接防御兵器のみとしたことと、空間戦闘機十二機とRXモビルスーツ十八機を標準搭載機数としていることがあげられる。

この準ホワイトベース級は開戦直後に相次いでジャブローで起工されたが、実際に竣工したのは一番艦サラブレッド（SCVA―72）と二番艦トロイホース（SCVA―73）の二隻でしかなかった。三番艦（SCVA―74・艦名未定）は、ホワイトベース（SCV―70）の復旧作業用に転用されたため、工程37%で建造は中止され解体されている。

準同型艦二隻を含むホワイトベース級五隻のうち、戦時中に艦隊配備されたのはホワイトベース、ベガス、サラブレッドの三隻で、ホワイトベースJr.とトロイホースは終戦時には慣熟訓練中であつた。唯一戦果を上げたホワイトベースの艦歴は、前例のない特異なものであつたと記録されている。同艦は宇宙世紀79年九月七日にジャブローで竣工し、公試と慣熟訓練をかねてルナII方面に出撃している。途中、RXモビルスーツを受領するために寄港したサイド7で、シャア少佐（当時）の部隊の攻撃を受けた。かろうじて勝つたものの、正規の乗員の大部分を失い、民間人の手でルナIIへ回航されている。その時の手際は、ベテラン乗員もかくやというほどの運用ぶりだったらしい。当時、V作戦の最高司令官であったレビル將軍は、戦時特例法を楯にして同艦に乗り合わせた民間人のうち、主だった者をホワイトベース勤務を命じた。

後にニュータイプとしての素養が認められたことで、実戦部隊としての任務のほかに、新兵器の試験部隊としての任務も命じられている。地球降下後は、各地を転戦しオデッサ作戦を最後に、ジャブローに帰港。一ヶ月半のドック入りの後、星一号、チェンバロの両作戦に参加している。チェンバロ作戦では、ア・バオア・クーへの血路を開いたものの集中砲火を受け大破着底してしまつた。乗員はほぼ全員救出されている。同艦の戦果は確認されただけで、艦艇十一隻撃没あるいは大破、モビルスーツ等一二〇機以上撃墜をマークしている。この中には地球攻撃軍司令ガルマ、ザビ大佐のガウ攻撃空母や宇宙攻撃軍司令ドスル、ザビ中將のビッグ・ザムも含まれている。この記録は今次大戦で単独艦の戦果としては最高である。

なお、ホワイトベース級の主要目は次の通りである。全長二百五十メートル、全幅百九十メートル、基準重量六万八千トン、エンジン推力（巡航時）三万八千トン二基、武装五十八センチ連装砲一基、連装メガ粒子砲二基、連装機関砲座十八基、ミサイルランチャー三十二門、艦載機は、RXモビルスーツ六機、戦闘機等十機。乗員数（定員）二百二十五名。

●ヒストリー・オブ・モビルスーツ

●発行所／東京都台東区駒形2―5―4

●発行所／東京都台東区駒形2―5―4

●協力／講談社・日本サンライズ

（この本は、昭和58年3月―59年6月に発行されたMSVハンドブックを一冊にまとめたものです。）

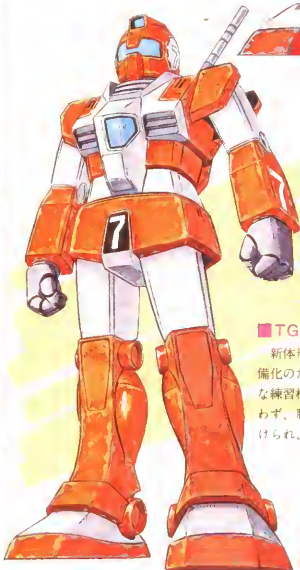
# HISTORY OF MOBILE SUIT

メカニカルデザイン

大河原 邦男

## ■RGM 79ライトアーマ

ビーム兵器戦である事を考慮して、パイロットの要請で徹底した軽装甲とされたタイプ。ハンドガンは、ビームスプレーガンでは無く、ガンダム同様のエナジーキャップ方式によるビームガンである。



## ■TGM 79ジムトレーナー

新体形の兵器であるモビルスーツの実戦配備化のため、シミュレーションの他にこのような練習機も使われた。装甲材は良質の物は使わず、胸には上下タンドムのコクピットが設けられ、教官席はガラスウインドで覆われる。